様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　15　日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2009 ～ 2012
課題番号：２１３２００８２
研究課題名（和文）テンス・アスペクト・モダリティの相関について－日本語と韓国語を中心に－
研究課題名（英文）The correlation of tense aspect and modality -in Japanese and Korean-

研究代表者
金　善美（KIM　SUNMI）
天理大学・国際学部・准教授
研究者番号：20411069

研究成果の概要（和文）：日韓両言語の対照研究を通じてテンス・アスペクト・モダリティ形式（以下 TAM 形式）の相関を明らかにしようとした本研究は、研究期間中、日本語標準語、韓国語標準語の TAM 形式の相関をみると同時に、琉球語宮古島方言（池間島方言）、韓国語済州島方言を対象に現地フィールド調査を通じて現地方言の自然談話を収集し書き起こし作業を行った。また研究成果は国内外の学会で発表を行うと同時に、最終年度には韓国・日本・アメリカの専門家を招いた国際シンポジウムを開催、研究成果の発表及び意見交換を行った。

研究成果の概要（英文）：The goal of this study has been to clarify the correlation among tense, aspect and modality systems (TAM systems) through a contrastive study of Japanese and Korean. We collected data that reflect the correlation among the TAM systems not only from standard Japanese and Standard Korean, but also from Miyako Ryukyuan (Ikema dialect Miyako in particular) and the Jeju dialect of Korean. We conducted fieldworks to collect natural discourse data, transcribed them and analyzed the TAM systems. The research results have been presented at conferences in Japan and abroad. An international symposium was held in the final year inviting experts from Korea, Japan and the United States to exchange views on the TAM systems of these languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
２０１０年度	2,700,000	810,000	3,510,000
２０１１年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
２０１２年度	3,500,000	1,050,000	4,550,000
総　計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：意味論、フィールドワーク、韓国語、日本語、韓国語済州島方言、琉球語宮古島方言

１．研究開始当初の背景
代表者の金　善美は、韓国語の keyss（未来、推量）は制限なく質問疑問文にすることができるが、もうひとつの未来、推量の形式であ

るul kes-i(未来連体＋もの＋copula)は、推量の解釈では非常に限定された場合にしか質問疑問文にできないという事実を発見した。すなわち、ul kes-iの疑問形は特別の場合にしか推量の意味を持てず、「nayil-un pi-ka o-l kes-ipnikka（あすは雨が降るでしょうか)」のように言うことはできない。この文は、雨をふらせる能力を持つ雷様のような対象にしか質問できない。この制約を捉えるためには、未来と推量の関係、質問行為などについて綿密な研究が必要となるが、特に、推論や意志の決定に用いる知識領域がどこにあるかが重要である。申請者たちは指示詞記述に利用した領域を知識領域に拡張することで、この現象の記述と説明に利用できる理論装置を開発した。さらにこの論文を共同執筆する際にTAM形式の相関を、知識のあり方、現場のとらえ方と関連させて研究する可能性に思い至った。それまでの100回にわたり日本語と韓国語に関しての発表会を重ねてきた成果のうち、TAM に関係する発表をこの観点からまとめることに同意した。その際、琉球方言のTAM形式との比較の有効性が指摘された。たとえば、琉球方言のいわゆる直接目撃をあらわすテンス形式の研究には韓国語の過去回想形(te)との比較が有効である。また、日本語標準語のテイル形の完了用法には経験の解釈が可能であるが、韓国語のko iss-taの形式にはその解釈はなく、ある意味で目撃の解釈がかかわる。この違いの記述にも、琉球方言宮古島方言との比較が有効であることが分かっている。また同様の関連性が韓国語済州島方言の現象に見ることができることが指摘され、金　善美の同志社大学勤務時代の同僚であり、済州島方言の母語話者であると同時に同方言のテンス・アスペクトの専門家である高　榮珍氏に協力を要請し快諾を得た。

２．研究の目的

本研究は、日韓両言語の対照研究を通じてテンス・アスペクト・モダリティ形式（以下TAM形式）の相関を明らかにしようとするものである。TAM 形式はこれまで独立した文法カテゴリーとして見られ、それぞれに記述がなされてきた。本研究は、日本語標準語、韓国語標準語（ソウル方言）という、系統は異なるけれど類型論的に近い２つの言語の詳細で微視的な記述を行い、それによってTAM形式の相関をみると同時に、琉球宮古島語（特に池間島方言)、韓国語済州島方言などの現地フィールド調査を通じて、両言語と系統を同じくしながら標準語と非常に離れた言語を比較することで分析の精度を上げ、談話管理理論（動的意味論)、類型論という明示的な理論的枠組みでTAM形式の相関を原理的に説明する試みである。

３．研究の方法

日本語標準語、韓国語標準語、琉球宮古語（特に池間島方言)、韓国語済州島方言においてTAM 形式を表す形式を網羅的に挙げ、その用法について本研究の記述方法による相関を記述した。琉球宮古語、韓国語済州島方言についてはそれぞれ現地フィールド調査を通じて蓄積した自然発話データを書き起こし、当該の用例にタグを付けて、検索可能にした。これには ELAN の最新バージョンを使用し、音声データとリンクさせ、イントネーションが検索できるようにした。

４．研究成果

これまで現地フィールド調査を通じて自然発話データを書き起こして蓄積した一次資料に基づいて韓国語と日本語のTAMの相関を理論的に研究したものはなかった。その中で本研究は、(1)日本語、韓国語、英語の先行研究を踏まえた上で日韓の理論的、記述的対照研究を行うことができた、(2) TAM 形式の個々の記述にとどまらず、その相関を説明する形式理論を提出できた、(3) フィールドワークを含めた一次資料の利用により確実に新しい言語事実を言語学の知見に加えることができた、(4) 本研究テーマにおける韓国・日本・アメリカの専門家が一堂に会する初めての国際シンポジウムを日本で開催し、研究成果の発表及び意見交換を行うことができた。(5) 本研究によって蓄積された一次資料の内、公開許可を得た自然発話資料への書き起こし・タグ付け作業を行ったことによって、将来的にインターネット上の電子博物館等で公開するための理論的・記述的な基盤づくりを行うことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１６件）

① 高榮珍、近代韓国語研究の成果と課題－「近代国語」の起点問題と関連して(原文：韓国語)、韓日近代語文学研究の争点(原文:韓国語)、査読無、2013、pp. 199-240

② 鄭聖汝・円山拓子、非意志自動詞と「可能」―日本語と韓国語の観点から―、日本語言文化研究　第二輯(上)、査読有、2012、pp. 453-460

③ 金善美、現代韓国語と日本語の「遭遇系間投詞」に表れる話し手の事態評価につ

いて、ありあけ　熊本大学言語学論集、査読無、11 巻、2012、pp.69-84

④ 田窪行則、宮古池間方言の調査について、日本語学、査読無、35 巻 6 号、2011、pp.24-33

⑤ Takubo, Yukinori、Japanese expression of temporal identity: temporal and counterfactual interpretation of tokoro-da 、*Japanese/Korean Linguistics*、査読有、18 巻、2011、pp.392-409

⑥ 田窪行則、危機言語ドキュメンテーションの方法としての電子博物館作成の試みー宮古島西原地区を中心としてー、日本語の研究、査読有、第 7 巻 4 号、2011、pp.119-134

⑦ 千田俊太郎、基底の音節構造: 朝鮮語の媒介母音、ありあけ　熊本大学言語学論集、査読無、11 巻、2012、pp.1-46

⑧ Yuko Yoshinari , Prashant Pardeshi and Sung-Yeo Chung、Usage of Transitive Verbs in the Depiction of Accidental Events in Japanese and Korean 、*Japanese/Korean Linguistics*、査読有、Vol.21、2012、掲載確定

⑨ 金善美、談話に導入された指示対象の指示優先順位に関してー現代韓国語と日本語を中心にー(原文：韓国語)、韓国語研究の新地平(原文：韓国語)、査読有、2010、pp.225-246

⑩ 田窪行則、現代日本語の「場所」を表す名詞類に関してー韓国語、中国語、英語との違いを通じて(原文：韓国語)、韓国語研究の新地平(原文：韓国語)、査読有、2010、pp.247 - 288

⑪ 千田俊太郎、語の認定基準と意味について(原文：韓国語)、韓国語研究の新地平(原文：韓国語)、査読有、2010、pp.31 - 68

⑫ 鄭聖汝、直接使役と間接使役、何が問題だったか―新しい理論的モデルの提案に向けて―(原文：韓国語)、韓国語研究の新地平(原文：韓国語)、査読有、2010、pp.113-150

⑬ 金善美、韓国語と日本語におけるムードと反語法について、油谷幸利先生還暦記念論文集刊行編集委員会編『朝鮮半島のことばと社会―油谷幸利先生還暦記念論文集』、査読無、2009、pp.365-374

⑭ Takubo, Yukinori 、Conditional modality: Two types of modal auxiliaries in Japanese 、*Japanese Modality: Exploring its Scope and Interpretation,* London: Palgrave Macmillan、査読有、2009、pp.150-182

⑮ 田窪行則・金善美、韓国語と日本語のモダリティ表現の対照、油谷幸利先生還暦記念論文集刊行編集委員会編『朝鮮半島のことばと社会―油谷幸利先生還暦記念論文集』、査読無、2009、pp.298-312

⑯ 鄭聖汝、非意図的事象と他動詞構文―「所有」か「責任」か、それとも？―、日本語文法、査読有、2009、pp.53-69

〔学会発表〕(計２１件)

① 金善美、韓国語学習における対照言語学の活用、天理大学・奈良新聞社共催：外国語への招待ーコトバの中の社会　社会の中のコトバー(招待講演)、2012 年 6 月 30 日、天理大学杣之内キャンパス

② 金善美、On ironical interrogative sentences and modal adverbs in Korean and Japanese 、Adam Mickiewicz University(招待講演)、2013 年 3 月 18 日、Poznan, Poland

③ 金善美、韓国語の状況・継起限定・原因理由を表す副詞従属節について(原文：韓国語)、Adam Mickiewicz University(招

待講演)、2013 年 3 月 18 日、Poznan, Poland

④ Takubo, Y.、Counterfactuality and Japanese aspect、Workshop on Tense and Aspect in Korean and Japanese、 Seoul National University(招待講演) 、June 7th, 2012、Seoul, Korea

⑤ Takubo, Y.、Tense and aspect in Korean and Japanese: General overview 、Workshop on Tense and Aspect in Korean and Japanese 、 Seoul National University(招待講演)、June 8th, 2012、Seoul, Korea

⑥ Takubo, Y.、The Digital Museum project for the documentation of endangered languages: the case of Ikema Ryukyuan、Innovation: East Asian Perspectives、UCLA(招待講演、基調講演(Keynote Lecture))、January 25-26, 2013、USA

⑦ TIDA Syuntarô, Ko Young-Jin and Kim Sunmi、Morphological system of tense aspect and modality in the Jeju dialect of Korean、The International Symposium on Contrastive and Descriptive Studies of Japanese and Korean Dialects 2012 With Special Focus on Jeju Dialect of Korean and Tense Aspect and Modality、Kyoto University、2012 年 11 月 4 日、Kyoto

⑧ 鄭聖汝、済州方言の-*nta* について(原文：韓国語)、韓日方言対照と言語記述に関する国際シンポジウム 2012 －済州方言記述とテンス・アスペクト・モダリティを中心に－、京都大学、2012 年 11 月 3 日、京都

⑨ 金善美、反語的疑問文とモダリティ副詞について(原文：韓国語)、済州方言研究会 2011 下半期定期学術大会、韓国国立済州大学、2011 年 8 月 20 日、韓国

⑩ Takubo, Yukinori、Counterparts of the utterance time、Speaking of Possibility and Time2、ゲッチンゲン大学、2011 年 6 月 2 日、ドイツ連邦

⑪ 田窪行則、時間の前後関係としての日本語テンス・アスペクト：「V たまえ」「V るあと」がなぜ言えないのか、日本語文法学会、2011 年 12 月 3 日、東京外国語大学

⑫ Takubo, Yukinori、How to derive concessive meaning- the case of tokorode in Japanese、12th Korea-Japan Workshop on Linguistics and Language Processing、2012年3月24日、Kyunghee University 、韓国

⑬ 高榮珍、再び済州島方言の保全運動について(原文:韓国語)、済州方言研究会 2011 下半期定期学術大会、韓国国立済州大学、2011 年 8 月 20 日、韓国

⑭ 金善美、韓国語における反語法解釈が優先される条件について、日韓言語学者会議 －韓国語を通じた日韓両国の相互理解と共生－、2010 年 11 月 12 日、麗澤大学廣池千九朗記念講堂

⑮ 金善美・呂佳蓉、義務的な反語法解釈について－韓国語・日本語・中国語を中心に－、東呉大学外国語学院 2011 年多言語多文化同時学習支援国際シンポジウム、東呉大学、2011 年 3 月 27 日、台湾

⑯ Takubo, Y. and Y. Hayashi、 Kakari Musubi in Ikema Ryukyuan、The 20th Japanese/ Korean Linguistics Conference、Oxford Univ.、2010 年 10 月 2 日、Oxford, UK

⑰ Tida, Syuntarô, and Sunmi Kim 、Non-prototypical condition and cause: A comparison of Korean -(u)nikka and

Japanese -tara 、9th workshop on Inferential Mechanisms and their Linguistic Manifestation and Kyunghee Korea-Japan workshop on linguistics and language processing、2010 年 12 月 11 日 、Kyoto University

⑱ 鄭聖汝・吉成祐子、非意図性と他動性の相関関係：意味的他動性と統語的自他のはざまで、日本語文法学会、2010 年 11 月 7 日、就実大学

⑲ 金善美、現代韓国語・日本語・中国語における指示詞の範疇解釈用法について、グローバル化における多言語同時学習環境及び政策　国際シンポジウム、国立政治大学、2009 年 12 月 5 日、台湾

⑳ 田窪行則・金善美、韓国語と日本語のモダリティ表現の対照、第 4 回日韓（韓日）人文社会科学学術会議、又石大学、2009 年 8 月 15 日、韓国

㉑ Takubo, Yukinori and Yuka Hayashi、Kakarimusubi in Miyako Ryukyuan、Workshop on Ryukyuan Languages and Linguistic Research、カリフォルニア大学ロスアンジェルス校、2009 年 10 月 25 日、USA

〔図書〕（計３件）

①松尾勇・金善美・千田俊太郎、同学社（東京）、佳子のソウル留学から…－中級韓国語教材－、2012、107

②田窪行則、くろしお出版、日本語の構造－談話と知識管理、2010、361

③鄭聖汝・李廷玟（編著）、太学社（原文：韓国語）、韓国語研究の新地平（原文：韓国語）、2010、383

６．研究組織

(1)研究代表者

金　善美（KIM　SUNMI）

天理大学・国際学部・准教授

研究者番号：20411069

(2)研究分担者

田窪　行則（TAKUBO　YUKINORI）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：10154957

高　榮珍（KO　YOUNGJIN）

同志社大学・言語文化教育研究ｾﾝﾀｰ・教授

研究者番号：90329954

千田　俊太郎（TIDA　SYUNTARO）

熊本大学・文学部・准教授

研究者番号：90464213

鄭　聖汝（CHUNG　SUNGYEO）

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：60362638